

1 子どもや親子を対象としたKid'sキャラバンを県内外の27ヶ所で展開

2011年4月より、小学校3年生以下の小さな子どもたちへの生涯学習支援をこれまでよりも強化することを目的として、「キッズひとはく推進室」が発足しました。キッズひとはく推進室では、小さな子ども向けプログラムの開発、子どもたちに科学のおもしろさを伝える科学コミュニケーターの養成など、さまざまな事業を進めていますが、児童館や幼稚園などに出かけてさまざまなプログラムを実施するキャラバン事業は大きな柱の一つです。2011年度は、兵庫県内のキッズキャラバンとして、神戸市内の25児童館、三田市と佐用町の幼稚園、猪名川町の小学校を訪問しました。児童館へのキャラバンでは、キッズひとはく推進室のメンバーがフロアスタッフとともに児童館を訪れ、デジタル紙芝居を交えて、植物、動物、化石などさまざまなテーマに基づいたプログラムが行われました。プログラムの中味は、事前に研究員が児童館を訪れて、児童館のスタッフと相談して決定され、キャラバン終了後には、事業の評価に役立てるため、児童館のスタッフに対するアンケートが行われています。なお、キッズひとはく推進室のキャラバンを始めとした事業を展開するに当たって、2011年度よりJST（独立行政法人科学技術推進機構）からの助成金（先進的科学館連携推進事業）をいただくことができ、事業の積極的推進に役立っています。



写真1. 小さな化石を顕微鏡で観察



写真2. イノシシの歯はどんなかな？



写真3. 児童館の近くにはこんなものが

...



写真4. 箱の中には何がある？

2 山陰海岸ジオパークに広がるひとはくの活動の場

平成 22 年 10 月、但馬地域北部を中心に京都府京丹後市と鳥取県の鳥取市・岩美町を加えた山陰海岸ジオパークが世界ジオパークに認定されました。ひとはくは、それ以前から 2 名の委員を派遣するなど、山陰海岸ジオパークの活動を主に学術的な面から支援し、世界ジオパーク認定においても一定の役割を果たしてきました。そして 23 年度は新しく設置された地域展開推進室が主体となり、山陰海岸ジオパーク地域での生涯学習活動を展開しました。

ひとはくジオキャラバン「おもれ～山陰海岸ジオパーク」は山陰海岸ジオパーク推進協議会との共催で、新温泉町山陰海岸ジオパーク館(23 年 7/16～8/29)、香美町海の文化館(9/1～9/27)、岩美町渚交流館(10/1～10/23)、鳥取市湖山池情報プラザ(10/29～11/20)、道の駅「神鍋高原」(11/23～12/18)、琴引浜鳴き砂文化館(12/23～24 年 1/15)、道の駅「てんきてんき丹後」(10/19～24 年 1/18)の各施設で開催しました。その間 42 件のセミナーやイベントを企画し、展示観覧者と合わせたビジター数は延べ 58,000 人にのぼりました。また、各イベントには実施した施設の皆さん以外にも地元で活躍されている方々や多くの団体に参画していただき、いずれの回も好評のうちに終わることができました。

香美町との共催で実施した「ひとはくジオパークセミナー in 香美町」や鳥取県立博物館と共催で開催したバスツアーなど、山陰海岸ジオパーク内では 17 回のセミナーを実施し、延べ 267 名の皆様に受講いただきました。この中には普段博物館のセミナーを受講されている方も多く、阪神間の人たちと山陰海岸の人たちの新たな交流も生まれました。またこれらに加え、11 月 12 日・13 日に豊岡市の県立但馬ドームで開催された山陰海岸ジオパークフェスティバルにも出展し、多くの方にひとはくの活動を知っていただきました。

これまでひとはくの活動はどうしても兵庫県の南部が中心になってしまいがちでしたが、山陰海岸ジオパークをきっかけに但馬北部での活動が展開されるようになり、さらにそれは県境を越えて鳥取県や京都府にも広がりました。また生涯学習を通じて直に地域の皆さんとの交流が深まりつつあります。これからも山陰海岸に限らず、全県をカバーした生涯学習活動を展開していきますのでご期待ください。



写真 1. 巨大テトラポッド作り(岩美町渚交流館)



写真 2. 地質図付き地形模型作り(琴引浜鳴き砂文化館)

3 県立丹波並木道公園にて小型恐竜の化石を発見

篠山市内の県立丹波並木道中央公園から小型の恐竜の化石が産出していることが分かりました(2011年7月15日記者発表)。同公園の管理者の依頼により篠山層群をしらべる会(人と自然の博物館連携活動グループ)が体験発掘会に使える石を探していたところ、2010年9月18日に同会の松原薫・大江孝治両氏が同公園内に残されている造成時の残土中から骨化石を含む岩塊を発見しました。この岩塊をひとはく恐竜ラボでクリーニングを進めたところ、鳥に近縁な恐竜であるデイノニコサウルス類の関節状態の前肢と後肢の膝周辺の骨であることが分かりました。その体長は1m前後と推定され小型ですが、恐竜の骨格化石が完全に骨が関節した状態で発見されるのは国内初です。2011年7月20日～31日には県立丹波並木道中央公園でボランティアの協力を得ながら残土の発掘が行われ、その結果、2010年発見の化石と同一個体である可能性のあるデイノニコサウルス類の脛骨と腓骨および中足骨、トカゲ類の部分骨格、そして小型の角竜(基盤的ネオケラトプ



写真 1. 県立丹波並木道中央公園での発掘調査(2011年7月)

ス類恐竜)の前顎骨、大腿骨および肋骨が見つかりました。この小型の角竜は2008年に篠山市宮田で頭骨の一部が見つかった角竜と類似しています。これまで県立丹波並木道中央公園内で発見された化石はすべて造成時に公園内の篠山層群(前期白亜紀、約1億1千万年前の地層)を削って出来た残土から発見されています。篠山層群からは2006年以来多くの恐竜化石が発見されていますが、この公園の地下にはさらに保存の良い恐竜の骨格化石をたくさん含んだ地層が残されているかもしれません。

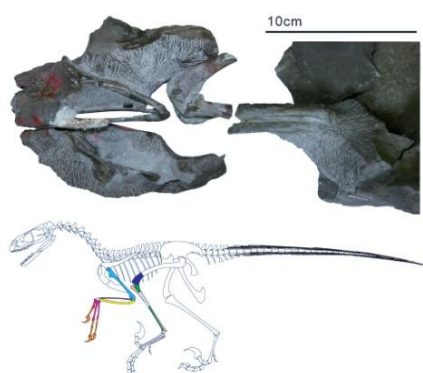


図2. 県立丹波並木道中央公園産のデイノニコサウルス類化石。岩塊中の化石と骨格の中での位置(塗りつぶした部分)

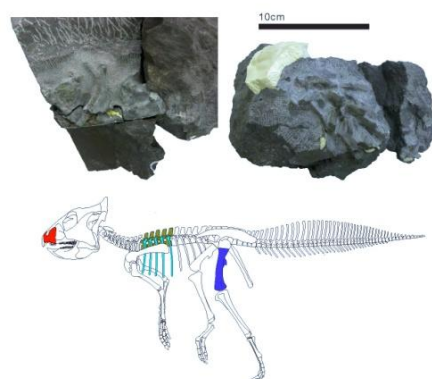


図2. 県立丹波並木道中央公園産の小型角竜類化石。岩塊中の化石と骨格の中での位置(塗りつぶした部分)

4 生物多様性協働フォーラム～関西から発信する多様な主体による広域連携に向けて～

愛知県名古屋市で2010年に開催されたCBD-COP10(第10回生物多様性条約締約国会議)では、「人類が生物多様性の恵みをうけ続けるにはどうすべきか」が議論され、「社会のあらゆる場面で生物多様性の保全と持続可能な利用の取り組みを実践すべき」との目標が共有されました。生物多様性の保全と持続可能な利用を実現するには、社会のあらゆる関係者の協働が不可欠です。

2011年度、ひとはくは、企業や行政が積極的に生物多様性の課題に関われるような社会環境を整えることを目指し、生物多様性に関する最新動向と事例、民・官・産・学など様々な立場の人々の連携について紹介する3回連続のフォーラムを、三菱UFJリサーチ&コンサルティング(株)とNPO法人西日本自然史博物館ネットワークと共同で企画しました。

第1回は「企業・地方自治体をとりにくく生物多様性の最新動向と事業インフラを活用した生物多様性CSRの展開」をテーマとして8月25日に当館にて、第2回は「企業の持続性を高める生物多様性の理解」をテーマとして10月17日に大阪銀行協会にて、第3回は「社会の『つながり』を活かした取り組みの展開」をテーマとして2月12日に兵庫県公館にて開催しました。講演には、環境省、関西広域連合、生物多様性分野で活躍する国際的NGOや、主に関西地域で生物多様性に積極的に取り組む企業の皆様を招き、生物多様性の課題にどう取り組むかについての様々な情報を提供いただきました。

本フォーラムには企業関係者や行政担当者をはじめ、市民団体、個人など様々な立場の方が多数聴講にお越しになりました(第1回:185名、第2回:147名、第3回:450名)。また、ロビーに設けた生物多様性の取り組みを紹介するブースにも多数の企業・行政・社会教育施設が出展し、参加者への情報提供が活発に行われました(第1回:30団体、第2回:21団体、第3回:30団体)。

各フォーラムでの聴講者の皆様が熱心に耳を傾ける様子を拝見し、関西圏における「多様な主体による参加と協働」への関心の高まりを強く感じました。ひとはくは2012年度以降もこのフォーラムの取り組みを継続し、関西における生物多様性にかかわる協働の実現に向けて主導的役割を担っていきます。



5 充実！二年目の「いきものかわらばん」

子どもの目線で生きものを観察し、自分の言葉で「かわらばん」(一枚物の手書き新聞)をつくるという初の試みで、昨年 818 点も集まったのに「味を占めて」、今年も「いきものかわらばん」を募集しました。

昨年は、締切りが近付いてもさっぱり集まってくる気配がなく、各研究員が知り合いの先生方に緊急に頼んで書いてもらった場合が多かったので、生徒たちもしぶしぶつくっていたことがわかってしまうような作品も多く見受けられました。しかし、今年は依頼する方もされる方も、事情がわかっている場合が多く、実際に手を動かす生徒たちも余裕があるというか、「楽しんで」かわらばんをつくった感がありました。

今年は 661 点で、昨年の 8 割という応募数だったのですが、全体をざっと眺めた感じでは昨年と大差がないように思いました。それはそれだけ今年作品には「ちから」がこもっていて見応えがあったということでしょうか。

多くの力作の中で、受賞作になったものは、内容をわかりやすく伝える「努力」が加わっているように感じました。タイトルがわかりやすく、大きな飾り文字。図や写真にアピール度がある。本文が簡潔で、ていねいに書かれている、等々。

展示の仕方は昨年の三連結を踏襲しました。二階の「空きスペース」を利用した展示で、大量の作品を効率よく展示するために、昨年いろいろ考えた末に編み出した方式です(写真 1~3)。昨年はよくも 818 点が詰め込まれたという感じで、1000 点はいけるかも、という自信が湧いてきたほどです。

それから、今年は、何人かの研究員のコメントが入りました。同定ミスで間違いの種名や、勘違いの指摘、プラスアルファの知識など、ごくわずかですが、研究員との交流ができたのではないかと思います。

次年度は、未就学児と保護者を対象にした「ひとはく キッズ かわらばん」という新しい試みにも手を広げながら、地学分野の作品増加を意識した「ひとはく しぜん かわらばん 2012」という改名でスタートします。



写真 1. 設営の様子



写真 2. いきものかわらばん展示会場



写真 3. 閲覧の様子

6 20年を振り返るミニフォーラムの開催

ひとはくは平成 24 年度をもって開館 20 周年を迎えます。これまで実施してきた事業を館内外の視点で振り返り、21 年目以降の展開につなげるべく、平成 23 年度にミニフォーラムを開催しました。ミニフォーラムの開催にあたり、館内で①生涯学習部会、②シンクタンク部会、③連携部会、④パートナーが求めるひとはく部会の 4 部会を立ち上げ、20 年の実績資料を収集・分析しました。その結果を基に、館外からもコメンテーターを招き、20 年の評価と 21 年目以降の提案を各部会のミニフォーラムで議論しました。

生涯学習部会では、生涯学び続ける基盤としての博物館を全県民が活用できるように、ユニバーサルデザイン等のハード面の整備、多様な世代の参画と協働によるソフトの実施、県下の各地域の特性や資源(ヒト・モノ・コト)を活かした取り組みを進めていくことが話し合われました。

シンクタンク部会では、これまでの人材や資料を活かした行政支援の拡大に加えて、特定テーマへの重点支援を継続し、企業とも連携して関西広域での事業を進めていくことが話し合われました。

連携部会では、人と自然の会や地域研究員、連携活動グループをはじめとする様々なパートナーとの連携を強化していくとともに、パートナー間の連携も積極的に支援し、エリアマネジメントに発展していく将来を描きました。

パートナーが求めるひとはく部会では、将来のパートナーの養成を視野に入れ「幼少期における自然・環境学習」に注目し、現世代から次世代への知恵や知識の継承や、幼稚園・児童館などの施設との今後の連携について議論しました。

これらのミニフォーラムの結果を基にして、平成 24 年度に「ひとはく将来検討」として、21 年目以降の計画をとりまとめます。

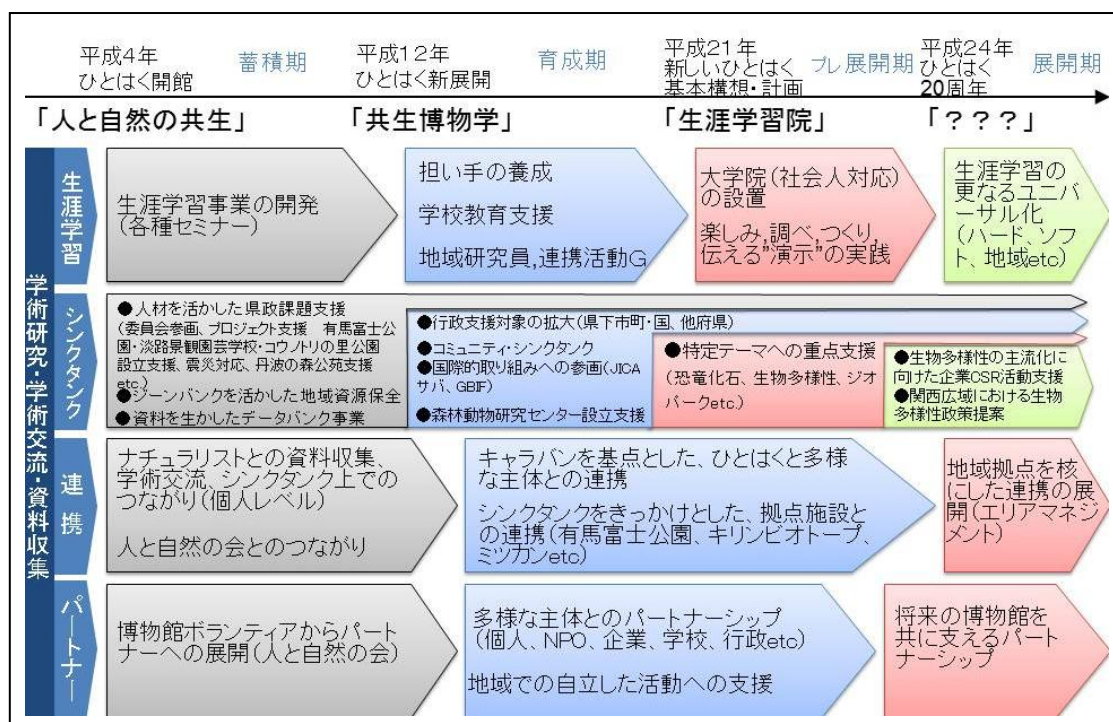


図 1. ミニフォーラムでまとめたひとはくのこれまでとこ

7 広がる共生の“わ”ー今年もにぎわった共生のひろば

2月11日の恒例行事となった「共生のひろば」が第7回目を迎えました。今年度も兵庫県内の各地域で活動している市民団体や学校団体を中心にした52件の発表を前に、さまざまな世代の参加者224名が活発な意見交換を行いました。今回は、里山を活動の場として利用しているグループから10件を超す発表があり、県内の里山への注目の高さを反映した発表会となりました。共生のひろばの常連となったグループが長年の継続データや活動内容を発表しただけではなく、共生のひろばに初参加のグループもレベルの高い発表を行いました。山陰海岸ジオパークをテーマにした発表や淡路島の化石の発表など、神戸・阪神地区だけではなく、兵庫県内のさまざまな地域を活動対象とした発表もあり、県内各地に世代を超えた共生のひろばの“わ”が広がっていることを実感できました。



写真 1. 里山関連団体の発表



写真 2. 名誉館長賞を受賞した篠山東雲高等学校の発表

8 加東市との協力協定を更新

本年 3 月、加東市との協力協定を更新しました。2009 年 7 月に、ひとはくは加東市の推進する「まちまるごとミュージアム事業」に協力するため、加東市との間で協力協定を締結しました。「まちまるごとミュージアム事業」は加東市の 3 町（滝野町、社町、東条町）合併 3 周年を記念して 3 年間実施され、ひとはくは本事業の推進を支援してきました。その主な事業内容は、夏休みに開催される展示会と自然観察会「子ども生き物調査隊」、および冬期の「加東市ノーベル大賞」の授与式です。夏期の「子ども生き物調査隊」は同時期に開催する展示会の内容に関連づけて、市内の小学生を対象に行う自然観察会です。2011 年は「子ども水辺の生き物調査隊」と題し、7 月 30 日に加東市内を流れる鴨川で観察会を実施しました。



一方、加東市ノーベル大賞とは、市内の小学生と中学生が夏休みに取り組んだ環境学習の成果の中から優れた作品を選出し、賞を授与するものです。ひとはく研究員は授賞作品の選定委員を務め、授与式において作品の講評を行ってきました。



この間、加東市では 2011 年 3 月に環境基本計画及び行動方針が新たに策定されました。今回の協定では、基本計画に掲げられた自然環境の保全や環境学習の推進において協力関係を深めていくことになります。

9 ミニ企画展示「みんなの福島展」を開催

2012年3月3日から4月9日まで、ミニ企画展「みんなの福島展」を開催しました。この展示は、地震、津波、原発事故、風評被害など、何重にも苦しめられている福島県の皆さんを応援するために企画されたものです。展示は3つのテーマで行われました。「ビッグパレットふくしま避難所記 写真展」では、福島県最大の避難所「ビッグパレットふくしま」での避難者の生活を記録した写真集「生きている生きてゆく：ビッグパレットふくしま避難所記」の中の写真が展示され、避難者の「つぶやき」も紹介されました。2番目の「福島のミュージアムから」では、困難に立ち向かう福島県内の博物館、アクアマリンふくしま・福島県立博物館・福島市子どもの夢を育む施設こむこむ・郡山市ふれあい科学館スペースパーク・ムシテックワールド・福島市古閑裕而記念館・いわき市立美術館などの活動を紹介し、担当者へのインタビューも紹介されました。次に「巡回パネル展放射線とエネルギーの科学」は、千葉市科学館製作の、放射線や原子力エネルギーに関する内容をわかりやすくまとめられたパネルが展示されました。他にメッセージ交換コーナーもあり、観覧者から寄せられたメッセージのコーナーが展示され、福島の方々との間でメッセージの交換も行われました。今後、この展示は他館での巡回も計画されています。



写真 1. ビッグパレットふくしま避難所記
写真展



写真 2. 福島のミュージアムから



写真 3. 巡回パネル展放射線とエネルギーの科学



写真 4. メッセージコーナー

10 東日本大震災「被災地支援キャラバン」2011

2011年3月11日に東日本大震災（東北地方太平洋沖地震）が発生後、ひとはくは、被災地支援として様々な活動を行っています。その一つである「ひとはく Kids キャラバン」は、いわゆるアウトリーチ活動で、これまで当館が行ってきたキャラバン事業の経験を生かしての活動です。2011年度は第1回目の東北キャラバンとして7月に宮城県に、第2回東北キャラバンとして、12月に青森県と岩手県をそれぞれ訪問させていただきました。

宮城県では「ひとはく Kids キャラバン in 仙台」として、仙台市若林区の六郷児童館と七郷児童館で行なうことになりました。ひとはくのスタッフの他、兵庫県からは佐用町昆虫館を運営するNPO法人「こどもとむしの会」のスタッフ、現地の財団法人 仙台市公園緑地協会・太白山自然観察の森 自然観察センター（仙台市建設局百年の杜推進部公園課の所管施設）、仙台市科学館、仙台市青葉の森緑地管理センターなどのスタッフと連携して「たのしい かや遊び」（蚊帳の中に翅を持った虫を放し、さわりながら観察をする）、「化石のレプリカづくり」（お湯で柔らかくなる樹脂を使ってアンモナイトなどのレプリカをつくる）、「身近な植物で遊んだり、クルクル回るタネの模型をつくろう」（イタドリの茎の笛を鳴らしたり、マツ類のタネの模型を作って飛ばしたりする）などのさまざまなプログラムや展示を行いました。

青森県八戸市で行なった「ひとはく Kids キャラバン in 八戸」は、八戸市児童科学館に行かせていただきました。これは、NPO法人のあおり NPO サポートセンターで調整をさせていただきました実現しました。また、八戸市役所へも表敬訪問をしました。



写真 1. 六郷児童館でのようす

岩手県久慈市で行った「ひとはく Kids キャラバン in 久慈」は、「もぐらんぴあ・まちなか水族館」に行かせていただきました。これは、独立行政法人科学技術振興機構（JST）を通じて依頼があって実施することになりました（JST 先進的科学館連携推進事業の一環として行った）。第2回の東北キャラバンでも地元のスタッフの方々と一緒に、生き物や自然に関するさまざまなプログラムを行い、たくさん子どもたちの笑顔を見ることができました。



写真 2. 七郷児童館でのようす



写真 3. 仙台市児童科学館でのようす

11 津波によって被災した学術標本のレスキュー

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は大規模な津波を引き起こし、東北地方の太平洋岸を中心に甚大な被害をもたらしました。博物館も例外ではなく、今回発生した津波により岩手県の陸前高田市立博物館は壊滅的な被害を受けました。陸前高田市立博物館は1959年開館の古い歴史をもつ総合博物館で、東北地方初の公立の登録博物館としても知られており、収蔵庫には陸前高田の自然・歴史・文化に関する15万点以上の資料・標本類が収められていました。同館は、隣接する図書館とともに屋根以外のすべてが津波に飲み込まれ、職員6名全員が死亡または行方不明となり、学問の発展や復興に寄与するであろう貴重な資料・標本類は、流出あるいは砂泥まじりの海水をかぶり、時間の経過とともに失われようとしていました。収蔵資料のうち自然史系の標本については、陸前高田市教育委員会の要請を受け、岩手県立博物館が中心となって被災建物からの搬出作業が行われました。しかし、回収された資料が膨大であったため、全国の博物館等に対して支援要請が出されました。この要請を受け、当館では植物標本と地質標本のレスキューに取り組みました。

植物標本レスキュー：深刻な被害をうけた約7,500点の標本のうち、600点を当館に送ってもらい、植物担当研究員と資料整理職員らが、洗浄・整形・再乾燥等の作業を実施しました（平成23年5月17日～6月2日）。その後、入力したラベル情報とともに、修復した標本を岩手県へ返却しました。今回の震災において、生物標本など貴重な学術資料が被災し支援が必要な状況であることは、当時報道されておらず、多くの人々が知らない状況でした。そのため、今回の標本レスキューに関する情報の早期公開を心がけ、作業の進捗や作業方法等の関連記事をひとはくブログで順次公開し、一般来館者が作業の様子を見られるよう実験セミナー室で標本修復作業の多くを行いました。また、修復作業およびラベル情報の入力が完了した後は、ひとはく展示室4階において、「津波被害にあった標本を救おう展(2011年6月18日～9月30日)」を開催しました(詳細は、人と自然 22: 53-60 (2011) をご参照ください)。

地質標本レスキュー：旧陸前高田市立生出小学校（陸前高田市立博物館・海と貝のミュージアム仮収蔵施設）で実施された第1次救済事業(平成23年8月1日～8月5日)に地学担当研究員2名が、第2次救済事業（同10月4日～10月7日）に同研究員1名が派遣され、地質標本の殺菌・消毒と水洗作業を行いました。また、資料のおおまかな再分類とラベルに記された各資料の基礎情報の保全と復元を行いました。



写真1.植物標本レスキューの作業の様子



写真2.「津波被害にあった標本を救おう展」の様子

12 生物多様性に配慮した被災堤防法面の修復

東日本大震災は巨大津波により沿岸部の地域に甚大な人的・物的被害をもたらしただけでなく、内陸部の路面や山地斜面、河川下流部の堤防法面に土壌陥没や亀裂を多数もたらした。これらの堤防法面の陥没や亀裂は出水による破堤の原因となるため、応急盛土やブロック設置などの復旧工事がなされている。一方、堤防法面は、堤体保全のための定期的な草刈り作業が実施されることで、近年全国的に減少の著しい半自然草原が維持される貴重な生態系である。東日本大震災の復興にあたっては、防災だけでなく、このような生物多様性保全の機能を備えた堤防法面の修復・維持管理が現地で望まれているものの、その手法は確立されていない。人と自然の博物館ではこれまでに多数の河川堤防の草原を調査し、生物多様性の高い草原植生の復元・創出手法に関する研究を進めてきた。このような背景の下、国土交通省東北地方整備局ならびに財団法人河川環境管理財団からの依頼を受け、宮城県内を流下する鳴瀬川、阿武隈川、名取川の堤防法面において、当館研究員と関係諸機関の協働により植物・植生調査を実施した。その結果、ナンプアザミなど本地域に特徴



写真 1.河川堤防法面

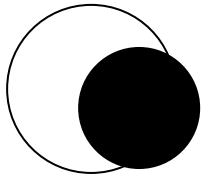
的な草原生植物の多く混生するチガヤ草原が確認され、当地で植生復元・創出すべき草原のモデルとなる植分のデータを得ることができた。今後、本調査資料をもとに、生物多様性に配慮した堤防法面の修復が進められることが期待される。



写真 2.調査の様子



写真 3.ナンプアザミ等を含む草原生植物の多様性の高い植分



平成 23 年度のタスクフォース事業報告

タスクフォース(組織群)について

従来の組織群とは別に平成 20 年度から導入したものである。各タスクフォースは、短期の課題を達成するために結成したものである。構成員は、リーダーおよびサブリーダー、その他であり、人員は、実情に応じて年度途中でも変更可能にしている。また、新たなタスクフォースを発足できるようにしている。平成 23 年度は 2 つのタスクフォース(恐竜・化石、マーケティング)が結成された。

■ 恐竜・化石 タスクフォース

(1) 第6次発掘調査の実施

・平成 23 年 12 月 11 日～平成 24 年 1 月 15 日に実施。発掘ボランティアの参加人数は、のべ 139 人(登録は 31 名)であった。子供のものと思われる竜脚類の歯が発見された。

(2) 県立丹波並木道中央公園における調査

・県立丹波並木道中央公園における残土の調査を7月 20 日(水)～31 日(日)に実施、小型恐竜・脊椎動物化石を含む岩塊4個を発見した。同公園内に化石密集層が伏在する可能性が高まった。

(3) 国際シンポジウムに向けた準備

・篠山市において「恐竜化石シンポジウム in たんば 恐竜の世界をよみがえらせる」(10 月 22 日)を共催した。米国の化石クリーニングの専門家、恐竜研究者による講演、そしてパネルディスカッションでは、恐竜復元を行っているアーティストとこれら専門家によるディスカッションにより即興で復元画を描くというこれまでにない試みがなされ、大変好評であった。

(4) 恐竜化石を活かした教育普及活動の充実

・篠山産業高等学校「りぼん工房」による「チョコレートを使った化石のレプリカ作り」を開催した。
・丹波市小学校理科教員にたいする「篠山層群の地質と化石」をテーマとした講座・野外実習の開催、丹波市恐竜を活かしたまちづくり課・丹波市教育員会編「丹波の恐竜と大地の秘密」学習パンフレットの監修協力、篠山市教育委員会主催の小学校校外学習への協力、篠山市教育委員会社会教育・文化財課編「？からはじまる」施設案内パンフレットの監修協力を行った。

(5) 展示および演習コンテンツの充実

・館内外で行った様々なイベント・展示(恐竜化石シンポジウム、サイエンスカフェ、恐竜フィギアの展示、丹波並木道公園産ディノニコサウルス類化石の復元模型の製作等)に恐竜復元を行っているアーティストに協力していただき、博物館と恐竜復元アーティストとの協働が始まった。

(6) 三田の化石発掘体験広場の活用

・トライやるウィーク(平成 23 年 6 月)およびセミナー(平成 23 年 11 月)にて三田の化石発掘体験広場を活用した。

(7) 研究成果や事業の新聞等への報道推進

・展示特別企画「丹波と恐竜を知ろう2011-第五次発掘報告」について(平成 23 年 4 月 7 日)
・「ひとはく恐竜・化石プロジェクト 中間報告書」について(平成 23 年 5 月 12 日)

- ・竜と獣の道学・連続セミナーについて(平成 23 年 6 月 2 日)
- ・県立丹波並木道中央公園産出の恐竜化石とその発掘調査について(平成 23 年 7 月 15 日)
- ・シンポジウム「恐竜の世界をよみがえらせる」の開催について(平成 23 年 9 月 1 日)
- ・県立丹波並木道中央公園の発掘調査結果について(平成 23 年 9 月 30 日)
- ・第 6 回丹波恐竜化石発掘等連絡調整協議会の開催について(平成 23 年 10 月 21 日)
- ・丹波の恐竜化石第 6 次発掘調査にかかる現地説明(平成 23 年 12 月 11 日、発掘現場)
- ・丹波の恐竜化石第 6 次発掘調査について(平成 24 年 3 月 1 日)

以上のように、今年度の重点事業をほぼ当初の計画どおりに実行した。また、そのことにより次年度以降の活動にもつながる成果を得ることができた。

■ マーケティング タスクフォース

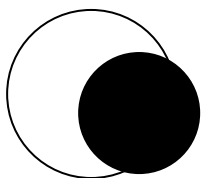
(1) ひとく事業実施に関わる企業との連携

- ・広告協賛企業数は 55 団体に上ったが、これは昨年度実績よりも 11 団体の減少となった。

(2) 外部資金を活用したひとく手帖広告協賛の募集による印刷資金調達

- ・55 団体からの協賛金により、例年と同じ頁数のひとく手帖を出版できるだけの資金を調達したが、金額ベースで 25 万以上の減額となっており、次年度以降のさらなる協賛先の開拓が重要な課題である。

3 月 11 日の東日本大震災を契機としての日本全体の経済活動の低下は、ひとく活動への協賛を得る上でも大きく立ちちはだかる試練となった。館員諸氏の尽力により、ひとく手帖出版に必要な最低限の資金を集めることができたのは、縮小する経済活動の中で今後どのようにして、広範な企業・市民団体との連携を深めてゆくのか、その戦略を練り直す上での試金石として捉えたい。博物館がより広範な活動を行うための活動資金としての協賛資金を集める上で、その受け皿となる組織のあり方について今年度は検討を行ったが、その検討成果の一部は、24 年度の 20 周年記念事業実行委員会の設立に活かされることになった。次年度以降は、広告のあり方等を含めて企業との協賛をどのようにしてより前進させるのか、そのためのタスクフォースとしての取り組みが新たな課題として浮上している。



平成 23 年度事業報告

人と自然の博物館では、その活動内容をよりわかりやすくかつ明確にするために、平成 14 年度から「中期目標」と「措置」を設けている。中期目標は、いわば博物館の行動の指針となる大項目であり、これが全部で 9 項目設けられており、それぞれに達成を目指すべき目標値(指標)が設定されている。そして、この中期目標の各項目の下位項目として「措置」が設定されている。措置では、中期目標の達成と博物館活動の活性化に資する具体的な項目について、その行動の方針と、具体的な数値目標が設定されている。

次ページ以降の図表および解説は、中期目標の各項目に即して、平成 23 年度の博物館の活動内容とその自己評価、および平成 24 年度の事業方針を整理したものである。また、中期目標を支える措置の項目については、それぞれについての目標値・実績・達成度(%)を示した。

なお、平成 19 年度に中期目標と指標、および措置について、平成 14 年度から平成 18 年度の活動成果をふまえて、さらに社会のニーズへの対応を考慮して修正を行った。平成 23 年度は、平成 21-22 年度の実績や達成状況、博物館の将来構想を吟味したうえで中期目標と措置の最終案を設定し、それに従って事業を進めた。

1 研究

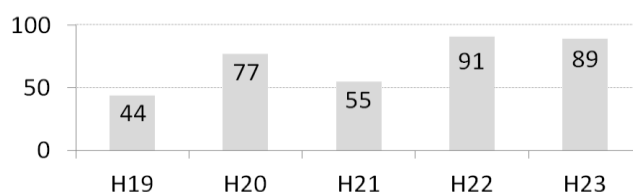
研究
推進室

兵庫から世界を対象に自然・環境に関する調査研究を行い、その成果を新しいプログラムやコンテンツ開発等の事業にフィードバックさせます。

1-1 学術論文数

学会等の査読を経て掲載された学術論文数

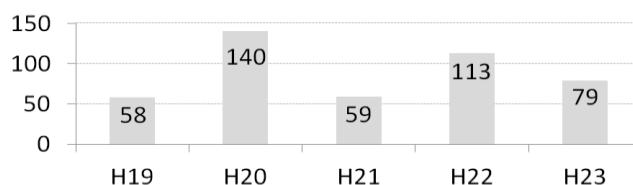
中期目標：40本/年
平成23年度：89本(223%)



1-2 一般向け著書数(総説・その他)

自費出版を除く一般向け著書、雑誌・新聞等の執筆数

中期目標：80本/年
平成23年度：79本(99%)



平成23年度の取組みについて

全ての博物館活動の基礎となる「自然・環境」また「人と自然の共生」に関する研究を進め、その成果について研究員あたり最低年間1報を学会誌等で発表し、さらに一般市民向けの著書・新聞・雑誌等でもそのエッセンスを積極的に公表することを目標に掲げました。

平成23年度の達成状況と自己評価

学術論文の公表数は、第2期中期目標期間中最多となった昨年にはわずかに及びませんでした、計89報と目標値を大きく上回りました。いっぽう一般向け著書等は目標値を大幅に上回った昨年に比べ79編と大きく減少してしまい、目標値に及びませんでした。本年度も学術論文数、一般向け著書数とも研究員の間で偏りがあり、最低限の目標がすべての研究員において達成されたわけではありませんでした。

平成24年度の取組に向けて

最低限の学術論文また一般向け著書の公表が、博物館の総体として、またひとりひとりの研究員においてももれなく達成されるよう、引き続き努力を重ねることが肝要です。より多くの研究成果をあげるため、科学研究費補助金をはじめとした助成金の獲得にむけ、勉強会の開催・情報の共有を推進します。また、「総合共同研究」などの研究部横断的な課題にも取り組み、研究成果の多様化・学際化にも努力します。

2 資料

研究
推進室

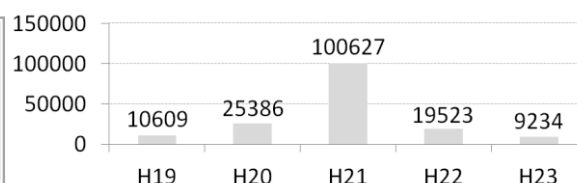
質の高い特色ある資料の収集を行い、学術利用のみならず「演示」への利用を積極的に推進します。

2-1 資料の登録点数

「ひとく資料データベース」への年間登録件数

中期目標：10,000 点/年

平成 23 年度：9,234 点(92%)

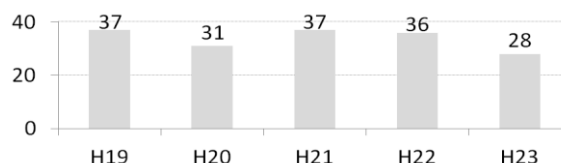


2-2 資料の利活用件数

資料の館外利用件数(貸出資料件数・館外展示件数)とマルチメディアデータ等の提供件数の合計

中期目標：50 件/年

平成 23 年度：28 件(56%)



平成 23 年度の取組みについて

収蔵資料および環境情報の収集・保存またその研究等への利活用は、博物館の研究活動とともに博物館活動の根幹をなす。資料収集方針に従った研究員自らの環境情報を含む資料収集、県内外の自然史資料の受贈手続きを進めること。またこれらの資料や情報は利活用されて初めてその意義を発揮することから、登録件数だけでなく公開件数やその利活用の件数もその目標にあげました。

平成 23 年度の達成状況と自己評価

収蔵資料の登録点数は平成 22 年度の値の半数程度で、年間目標の 1 万点をこの 5 年間で初めて下回った。登録資料 9,234 点は、館 HP の他サイエンスミュージアムネットや地球規模生物多様性情報機構 (GBIF) でもデータを登録し、全世界からアクセス可能で、閲覧・利用することができます。画像等のマルチメディアを含む博物館資料の貸し出し件数・館外展示などの「利活用件数」は目標の 56% (28 件) にとどまりました。

平成 24 年度の取組に向けて

研究とともに博物館活動の根幹をなす、資料収集方針に従った資料の収集・受贈・整理登録は、分野に偏ることなく継続します。博物館資料・環境情報の利活用件数を増やすため、情報のインターネットによる公開や、県民や専門家にとって魅力的なコレクションの充実を図ります。一方で、演示をはじめとする環境学習などに有用な教材となる「資料」の整備を進めます。また地域住民や行政にとって有用な資料・情報が利用されるように「広報」をはじめ「利活用の仕組み」を整備します。

3 生涯学習の支援

生涯学習
推進室

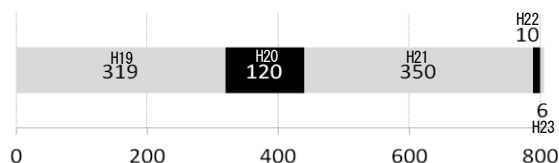
段階的・連続的な学習プログラムを提供し、地域研究員・連携活動グループを育成します。これらの「担い手」や他団体との連携を促進し、博物館事業の拡大を図ります。

3-3 地域研究員・連携活動グループ登録者数

地域研究員と連携活動グループ登録者数の合計

中期目標：500人(H23時点)

平成23年度：805人(161%)

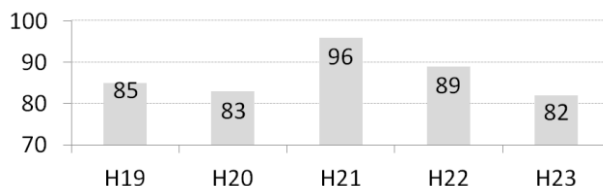


3-4 他団体との連携プログラム数

共催事業、協力事業、後援事業、館外展示件数の合計(地域研究員・連携活動グループによるものを含む)

中期目標：100件/年

平成23年度：82件(82%)



平成23年度の取組みについて

1) ひとはくを訪れて、自然・環境に関心をもつきっかけとなる展示・演示を展開する、2) ひとはくフェスティバルでのビジター数2万人、傘下関連団体数50(昨年度並み)を目指す、3) 地域研究員、連携活動グループの活動推進、4) 学校との連携や博物館の活用促進、の4項目を主な取り組みの骨子としました。

平成23年度の達成状況と自己評価

展示事業では、館内で29件の企画展示・ミニ展示を開催、この内、県民・学校からの出展も8件になり、特別な展示予算が無い状況下で、ひとはくを訪れて、自然・環境に関心をもつきっかけとなる展示・演示を展開する目標を達成できたと考えています。フェスティバルは「山陰海岸ジオパーク」をテーマに実施し、山陰海岸ジオパーク協議会、鳥取市観光協会、京丹後市観光協会などの参画も得て、のべ53団体(ミュージアムワールド36、ステージ7、まんぶく屋台10)の参加があり、ビジター数23,371人と盛況に執り行うことができました。スクールパートナー事業では、昨年度に続いて実施した第二回「いきものかわらばん」に661点の応募があり、児童の自然環境への興味や小中高校の来館促進などの狙いを果たすことができたと考えています。「共生のひろば」は、今年度は里山関係の市民団体や高校連携交流団体からの新規の発表がありましたが、発表件数は例年並みの52件、聴講者数は例年より若干少ない224名となり、発表者を完全に公募するなど、今後は実施形式を検討する必要があると考えています。

平成24年度の取組に向けて

24年度は、ひとはく開館20周年の年となります。これまでの研究・資料収集活動の成果を披露し、環境教育や演示でより活用できるように、本館展示室2階を「ひとはく多様性フロア：魅せる収蔵庫トライアル」として改修を行うなど、21年目のひとはくの新・新展開に向けた生涯学習支援の展開に力を注いでいきます。

4 シンクタンク活動の支援

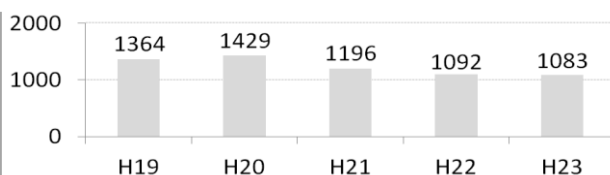
研究・
シンクタンク
推進室

自然・環境に関する県政課題に対して、適切な助言や提言等を行います。また、企業や行政団体等のニーズに応え、先駆的な調査研究を積極的に受託します。

4-1 県政・市町行政に対する貢献度

国・県・市町関連の委員会及びプロジェクト参画数

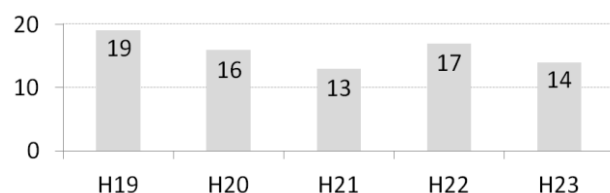
中期目標：1,000 件/年
平成 23 年度：1,083 件(108%)



4-2 受託研究件数

調査研究受託契約件数

中期目標：15 件/年
平成 23 年度：14 件(93%)



平成 23 年度の取組みについて

県・市また国関連部局の委員会・審議会等への学識経験者としての参画を進めました。県職員等の来館相談目標数を 1,000 件に設定しました。また、関連部局・施設、また企業とともに地域の問題を解決する受託研究の目標獲得件数を 15 件に設定しました。

平成 23 年度の達成状況と自己評価

博物館研究員の県政関連の委員会・審議会等への学識経験者としての参画数は 280 件（280%）にのぼり、それに関連して博物館に来訪する県職員等関係者の来館は 1,083 件で目標を達成しました。受託研究はここ数年ほぼ横ばい傾向で、23 年度は 14 件で目標をわずかに下回りました。受託研究金総額は 1,990 万円に達し、平成 22 年度の総額の約 1,230 万円を上回り目標に達しました。また、関西広域圏を対象として 3 回の生物多様性協働フォーラムを開催することが出来ました。

平成 24 年度の取組に向けて

博物館のシンクタンク活動が行政施策また県民の活動に活かされる状態にあり、野外調査や研究・プログラム開発などの多様な事業に及んでいます。COP10 で採択された目標や生物多様性ひょうご戦略の地域での具体的な活動を推進するための財政基盤の確保として、受託研究の獲得目標を昨年度より若干増やした 20 件、総額 2,000 万円とします。また、昨年に引き続き広域圏を対象とした生物多様性協働フォーラムを 3 回開催することを目標とします。

5 マーケティング・マネジメント

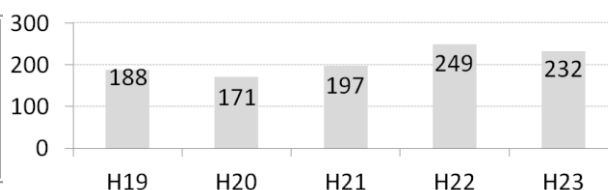
企画調整室

情報化社会に対応した情報提供を拡大し、広く県民の博物館事業への理解を醸成するとともに、博物館を活用する気運を高めます。

5-1 ホームページアクセス件数

ホームページに対するアクセス件数

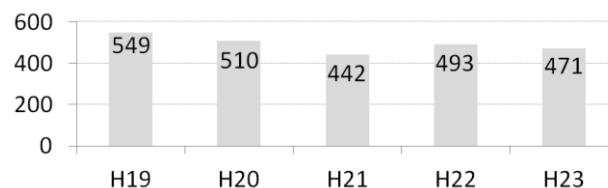
中期目標：300 千件/年
平成 23 年度：232 千件(77%)



5-2 メディア等出演件数

新聞・雑誌等記事掲載件数、テレビ・ラジオ等への出演件数の合計

中期目標：500 回/年
平成 23 年度：471 回(94%)



平成 23 年度の取組みについて

平成 23 年は、前年度に世界ジオパークネットワーク加盟が認定された山陰海岸ジオパークを支援すべく、ジオキャラバンや関連セミナーを実施しました。また、館として東日本大震災からの復興支援を、標本レスキューや被災地キャラバン、自然環境の調査・復元、復興計画の作成支援などを通して行いました。これらの取り組みを含め、博物館の役割を広く知っていただくべく、ホームページの更新回数を増やすことによって、知名度の向上に努めました。

平成 23 年度の達成状況と自己評価

ホームページに対するアクセス件数は、数値は 77% の達成に留まりました。博物館の事業の様子をブログで事後に詳しく紹介することが多く、今後は事業実施前の告知を兼ねた発信にも努めるなど課題が残りました。一方で、博物館事業の様子を動画で発信するなど、これまで以上にわかりやすく情報発信をする試みは、博物館を活用する気運を高める方法として有効でした。

平成 24 年度の取組に向けて

ひとはくは、平成 24 年度に 20 周年を迎えます。本年度から 20 年の歩みを検証し、21 年目以降のひとはくの展開に向けたミニフォーラムを開催するなど準備を始めています。平成 24 年度には、開館記念日の 10 月を中心に各種イベントを実施すると共に、一部展示の更新や移動博物館車の整備をすすめ、それらを広く県民に発信していきます。

5 マーケティング・マネジメント

企画調整室

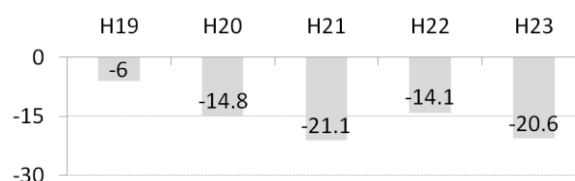
効率的で健全な博物館運営を目指します。

5-3 二酸化炭素排出量の削減

対平成 18 年度比での削減率

年度目標：-6%(H18 年度比)

平成 23 年度：-20.6%

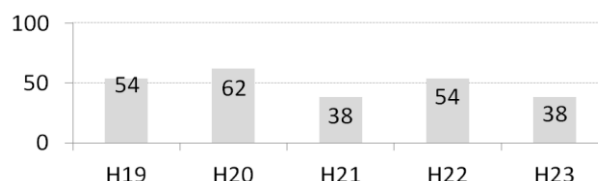


5-4 中期目標の達成度

中期目標の総指標数のうち達成した指標数の割合

年度目標：80%

平成 23 年度：38%



平成 23 年度の取組みについて

第 2 期中期目標の 5 年目の年度でした。継続して行っている事業を通じて多くの方に博物館の活動を知っていただくのはもちろん、新たに設置した地域展開推進室とキッズひとはく推進室による事業をあわせて、より効果的にひとはくの活動を広げるよう努めました。また、数値には無いものの、東日本大震災からの復興に博物館として貢献できることを考え、標本レスキューや被災地キャラバン事業、自然再生に向けた調査や復興計画策定支援などを行いました。

平成 23 年度の達成状況と自己評価

電気、水道、ガスの使用量から算出する二酸化炭素排出量は、平成 21 年度に次ぐ最高水準の削減を達成しました。一方で、中期目標の総指標数のうち達成した指標数の割合（達成度）は 38% であり、達成度が前年度よりも低くなりました。達成度の低かった数値の改善に努めつつ、中期目標を設定してからの 10 年の蓄積を元に、新たなひとはくの展開とそれを実現するための中期目標の再設定が必要だと考えます。

平成 24 年度の取組に向けて

平成 24 年度に 20 周年を迎え、将来検討をとりまとめることとなったので、第 2 期中期目標は 1 年延長し 6 カ年で検証することとしました。加えて、21 年目以降の展開に向けて、第 3 期中期目標を平成 24 年度に策定し、見直しと改善を加えた新たな博物館活動を展開していきます。